

日本語教育実践研究（9）

－「総合活動型日本語教育」の実践－

細川 英雄

この実践研究(9)では、早稲田大学日本語研究教育センター別科日本語専修課程のなかで「総合活動型日本語教育」を実践する「総合3-6」を実習クラスとし、その参与観察を踏まえつつ、「私はどのような日本語教育をめざすのか」についてレポートを書くという活動を展開しました。

このような実践研究を実施するのは、学習としての実践と教育としての実践について、それぞれが考えてみようという試みです。自分の「考えていること」を明確に確かめ、他者に伝え、その他者と具体的な人間関係を形成する力が、コミュニケーション能力だとするならば、教師自身もまた、そのような問題について考える必要があるでしょう。

ここでは、まず自分のめざす日本語教育について意見を述べ、その動機をもとに、関係者との議論を行い、その結果を踏まえて、自分の結論を出すという活動です。この過程で、参加者は、日本語教育のさまざまな立場に出会い、その立場とのインターアクションを経て、やがて自分の立場を形成するにいたります。

今回は、4名の参加登録者のうち、参加者全員の相互推薦により1名のレポートを掲載しました。この1編のレポートには、上記で述べた葛藤のプロセスがよく描かれていると判断できます。その他の参加者のレポートは、「言語文化教育研究」4号(言語文化教育研究室編・)5月上旬発行予定に投稿してもらい、編集委員会の合議を経て、掲載されることになっていますので、そちらをご参照ください。

参考：www.f.waseda.jp/hosokawa/

「実践研究とは何か」は、日本語教育を考えるものにとって不可避の課題です。だからこそ、今後も、実践と研究の関係を問い直すことが必要のように思われます。そのためには、実践と何か、研究とは何か、という問いをもう一度それぞれが考え、議論する場が不可欠でしょう。失敗を恐れずそれぞれの実践を相互に鍛えていく学びの場を提供したいと考えています。自らの実践の中から生み出した、さまざまな発見と学びの場への、多くの院生諸君が積極的に参加され、実践と研究をめぐる、さまざまな活発な議論の巻き起こることを期待したいと思います。

(ホソカワ ヒデオ・日本語教育研究科教授)